

「ペンテコステ、おめでとう」…クリスマス、イースターを迎えるときには「おめでとう」と呼びかけますが、「ペンテコステおめでとう」と昨年挨拶したでしょうか？はっきりと記憶がありませんし、「今日はペンテコステです。教会の誕生日です」というようにそれとなくお祝いの日として挨拶をしてきたように思っています。だから今日はあえて強調して「ペンテコステおめでとう！」と挨拶しあげます。そして「ペンテコステ、ありがとう」とも付け加えます。

教会の誕生日はイエスさまの十字架の直後で西暦33年あたりですから、教会の年齢は1987歳となります。この教会は神さまがつくれたとはいえ人間の集まりですから、いろいろ遍歴があります。親のいうことを聞かないことのように、神さまのいうことを聞かず、取り返しのつかない過ちも、教え上げたらきりがないほど起こしてきました。そして今も問題を抱えているのかも知れません。それでも神さまは教会を愛して、ちょうど親がごどもに「おまえが、いてくれるだけでいいよ。立派な子、よい子になる必要もないよ。いてくれるだけでいいよ。それが喜びだよ」と思われているように感じます。

今年はどこに、教会が存在すること自体に、喜びを感じます。存在すること自体が当然のことだと思いついているときは、教会に対して不満をもったり、もっと教会は立派であるべきだとか、もっとよい教会になるべきだという思いが募っていました。今年は、感染症のために、

このペンテコステを離ればなれに迎えることになりました。この不幸を幸いに変えることを、つまり教会の存在そのものを喜ぶチャンスとして与えてくださったっているのです。なぜなら、もしも教会が存在しなかったらと考える機会があったからです。春からの新企画を考えていましたが、先送りです。ひとつは月に一度でも青年の集まりなどを開きたいと考えていたものですから、いろいろな期待、楽しい妄想を抱いていました。

そこでもしも今青年だったら、こんな話をしてみたいなど考えることのひとつです；わたしたちに脅威をもたらすウィルスは0.1μmほどの大きさです。不織布マスクの穴の大きさがその50倍で50μm、飛沫は5μmですから穴の1/10の大きさですから容易に通過するのです。ウィルスを10μmのボールほどの大きさに100万倍に拡大するとわたしたちの足は260μm東京から福島や新潟、あるいは浜松ほどの長さになり、身長は180μmになり日本列島に横になると頭や足がはみ出すほどになるのです。そんなミクロな存在であるウィルスは体内の細胞に侵入し、わたしの細胞に寄生して自分の子孫を増殖する、抗体が迎撃すると炎症がひどくなり、ウィルスとの戦いは激化していく、下手をすれば、そんな小さな存在が命を奪いかねないのです。

しかしそういう観点からのみ命を論しても虚しいことをわたしたちは知っています。生命の維持活動が停止して肉体が炭素や水素、酸素に還元されてどうこうという科学的な言説だけで命を論じることは意味がないことを知っているからです。また命についてのある理解を持っているからです。ただその認識があまりにも漠然として

おり、曖昧なので、不安や恐れに対して十分ではないのでしょうか。存在するというところにゆるがない意味を確かにしたのではないのでしょうか。

そこで聖書に促され、自問します、何が命についての理解を曖昧にするのか、何が欠落しているか、——それは互いの存在を認め合う関わり、すなわち互いに愛し合う関係があるかないかなのです。

イエスの十字架の死、復活をとおして弟子たちは、存在の確信を与えられたようです。その確信となる言葉の主は弟子たちに向けて語られているのですが。その核心は、弟子たちが互いに愛し合うという唯一の戒めのもとにはじめて受け取ることができるのです。

13・34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。

互いの関わりが愛に根ざしていなければ十字架の死の意味を理解することはできないのです。

確かな理解は、外から与えられるのです、十字架に架けられて彼らのもとから去って行く後、肉体存在が消失する後、神は霊を遣わしてくださいとイエスはおっしゃるのです。

15「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わ

たしの掟を守る。16わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようになってください。

その霊は永遠に弟子たちと共に存在するのです。つまり、今、わたしたちと共にいるのです。この神とのつながりを執り成す霊により、わたしたちはある解き放たれることのないこだわり、執着から解き放たれるのです。その執着とは、肉体の存在だけを問題にすることです。肉体的に存在することと存在しないことに価値の優劣をつけます。肉体が存在することが肉体が存在しないことよりもよいことなのです。

その肉体の存在と非存在、生と死の優劣がわたしたちの執着のはじまり、苦しみのはじまりなのです。なぜなら存在するかしないか、存在とは何かを論じてもそれは生きる意味をもたらさない、砂をかむような営みだからです。

ヘルダーリンという詩人は、こういう言葉を残しました。「わたしたちが何であるかはどうでもよいことなのです。問題はわたしたちがどこへ行くこととしていられるかなのです。」

わたしたちは十字架の後のイエスについて、もしもひとが肉体の存在だけをみようとすれば、存在しないし、何の意味ももたらさないのです。むしろこう理解すべきでしょう。イエスは、わたしたちに、十字架の先に何をみることが望んでおられたか、です。十字架、肉体が存在しなくなる時を通して、わたしたちをどこへ導き

ゆこうとなさったのか、それが意味をもたらす問いなのです。

神は、霊を遣わすとイエスは言われます。それにより、わたしたちは生と死を隔てる壁を取りさり、「どこへ行くのか」という問いに、おほろげながらも思いをはせることができます。

この霊は弁護者、あるいは「助け主」と呼ばれます。この霊は、「真理の霊(17節)」です。

4・23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。

わたしたちも今日の礼拝をこの霊に助けられて、霊と真理をもって礼拝を献げているのです。会堂の礼拝が再開し、わたしたちはどこへ導かれ行くのか、教会の歩みに喜びを抱いて進み行きたいと願います。

17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。18わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。19しばらくすると、世はもつわ

たしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。20かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内に入ることが、あなたがたに分かる。21わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」